

ボランティアの心

詫摩信俊さん(国際 4期)高木稔雄さん(国際 10期)が KSC 情報誌に投稿、掲載されたものをご披露します。

お習字を通じて広がる輪！

詫摩 信俊(国際 4期)



平成9年入学時、クラブ活動を物色中、40年以上も筆硯に親しんできたせいで、自ずと書道部に興味をもち暫く練習風景を見ていたら、役員と思しき怖そうなおばさんに「あんた、ぼーとしてないで早よう先生の処に行ってお手本を書いて貰いなさい」と言われたのが入部のきっかけ。その年の学園祭に初出展、以降師範という役を仰せつかって書道部の指導に関わることとなり、そもそもこれが私の習字ボランティア活動元年です。

卒業後、いなみ野学園文化学科に入学、4年間「奥の細道」などで遊びながら書道部の指導も継続。部員相互の和を第一義に、書美の追求と技術の向上を目指し楽しいクラブ活動の推進に心がけ11年が過ぎました。その間わや区社協の紹介による老健や特養などの習字教室が16施設となり、うち6箇所を担当。各教室では「花」「海」「桜」や「八重山吹」「天龍下り」など、季節に合った手本を製作し、機能訓練を主目的として丁寧に指導しています。

「長いこと筆なんかもったことないから「手がふるえて書けんよ」「耳が遠いので聞こえないよ」「あっそれは漢字検定不合格よ」など楽しい会話を通して自ずと大切な信頼と友好の輪が広がっています。毎年秋に開催の書道部展覧会には、各人のユーモアに満ちた作品の全てを展示し、楽しい鑑賞会がもたれます。「おばーちゃん、これ書いたのー」「すごーい」など、家族との微笑ましいふれ合いの場が見られ共に感激一涙です。

近年、市民福祉振興協会主催の高齢者健康教室趣味講座や、神戸国際コンベンション協会主催の国際会議で来日の海外賓客に対する日本伝統文化紹介キャンペーンも多彩で、国際部会の協力を得て書芸の紹介に努めています。今年も10月に相楽園でイベントを開催予定です。

経済的にも時間的にも余裕のある高齢者にとって、地域社会は個々の役割発揮の可能性が豊富にある場です。ボランティア活動を通じて世代を超えた仲間との協働により、生活圏を更に広げ一層充実した生きがい感を達成したいものです。



子どもたちに感謝され、 自分も楽しくボランティア

高木 稔雄(国際 10期)



カレッジ生の頃は少し距離を置いていたボランティア。卒業後、「わ」に入りボランティア活動に参加してみて自分が結構楽しんでいるのに気がついた。今は「わ」のボランティア活動、そして「わ」を通じて紹介された「理科支援員(サイエンスアシスタント)」、「わ」とは別のNPOの活動への参加と活動範囲が広がり忙しく充実した毎日を送っている。ここ二年ほど続けている理科支援員のことを少し述べたい。

最近の子どもたちの理科離れの一因に小学校の先生方が日頃忙しく、理科実験の準備等に十分な時間をかけられないこともあると考えられている。理科支援員は、そういう状況の解消のため、全国の小学校を対象に文科省が予算をつけて設置しているものである。

業務は、朝、学校で鍵をもらって理科室を開け、その日の理科実験の準備を行なうことから始まる。薬品の調合、実験器材の準備。時には事前に、家で教科書を参考に実験のことをあれこれ思いめぐらしながらパソコンに向かって生徒向けの資料を作ったりする。これらは技術者としてあまり縁のなかった分野であるが、これが結構楽しい。実験に入るとテーブルの間を縫って生徒たちの実験を見て回る。危険なことをすれば注意する。行き詰っていれば助言する。子どもたちがなるほどと理解する笑顔をみるとうれしい。これらの一連の作業は、先生方に非常に感謝されている。昨年度は、5年生から実験最後の日に感謝の言葉の数々をもらった。「苦手だった理科が好きになった」とか「また来てください」などと書かれると満更でもない。

ボランティアは自分が楽しく、無理をしないことで気分的な余裕ができ充実感も得られ、そして相手への思いやりが生まれ感謝される。“ボランティア”と構えず力まず、初めの第一歩を踏み出せば、次々と見えてきて気持ちも前向きになってくるものと思う。あと三年、微力ながら子どもたちの理科離れ阻止に貢献できるように頑張りたい。そして子どもたちとの出会いを楽しみに心身とも健康でありたいと思う。



写真 = 理科実験